

「プロムナードゥ・ドゥ・パリ」におけるアルファンの公園観

佐々木 邦 博*

Alphand's View of Park in "Les Promenades de Paris"

Kunihiro SASAKI

摘要：アルファンは19世紀フランスの第二帝政期にセーヌ県知事オスマンによりパリ都市改造の緑地部門の責任者に任命された技術者である。彼は自ら関与した緑地を詳細に記録した「プロムナードゥ・ドゥ・パリ」という大著を残している。冒頭には長い序文があり、主に造園史が記されているのだが、著者の公園観が各所でじみでている。この序文を分析の対象とし、考察を進めた。その主な特徴は2点ある。第一点は造園の社会的地位が高くなく、芸術家になおざりにされている状況への強い反発である。第二点は造園史の流れを発展とみなし、自然風景への好みを媒介を務めるものとみなす見解である。この結果、パリの公園は最も進んだ造園と位置づけられているのである。

1. はじめに

19世紀に入るとヨーロッパ諸都市においては公園を設置する動きが起こるが、実際に公園の建設がめざましく進められるのはその後半のことである。パリではナポレオン三世が大統領、次に皇帝になった第二共和政から第二帝政にかけての時代（1848—52—70）に多くの公園が建設された。パリを統括するセーヌ県知事に任命されたオスマンはナポレオン三世の指示により都市の大改造を開始するのだが、この時に緑地部門の責任者としてアルファンを起用する。こうしてパリの緑地建設はアルファンのもとに推進されるのである。

この論文ではまずアルファンの生涯を概観するとともに、彼の著作、「プロムナードゥ・ドゥ・パリ」に焦点をあて、当時の造園をめぐる状況を考察し、彼が庭園や公園などの緑地をどう捉えていたのか、歴史的にどのように位置づけようとしたのか、その考えを明らかにするのを目的とする。

2. アルファンとパリ都市改造

まず、アルファンの略歴を記し、パリ都市改造との関わりを示すことにする。ジャン・シャルル・アドルフ・アルファン（Jean-Charles-Adolphe ALPHAND）は1817年10月26日にグルノーブルで生まれた。パリにある名高い理工科学校（エコール・ポリテクニック、École polytechnique）へ35年に入学し、37年に卒業、続いて土木学校（エコール・デ・ポン・エ・ショセ、École des ponts et chaussées）に入学する。翌年、ボルドーに赴任し、橋梁、鉄道、道路、運河の建設などを委

ねられる。この仕事を15年務め、1854年にオスマンによりパリに招かれるのである。そのいきさつはオスマンの回想録に述べられている。¹⁾ セーヌ県知事になる前にボルドーを県庁所在地とするジロンド県知事を務めていたオスマンはアルファンの能力を熟知しており、パリ大改造という新規の大事業の展開のための責任者に彼がふさわしいと考え、呼び寄せたのである。アルファンはまず最初にブーローニュの森の改造にとりかかり、その後他の様々な緑地建設や改造を進めて行く。また、そのためには必要となった苗畑や温室を作っている。1867年パリ万国博覧会の時には会場となったトロカデロ（Trocadéro）からシャン・ドゥ・マルス（Champ-de-Mars）にかけて整備工事を行なう。ナポレオン三世が退位し、第三共和政の時代（1870—1939）に入ってからもアルファンは引き続きパリの都市改造の要職につき、その事業を押し進める。彼に委ねられた内容は第二帝政末期からだいに増え、緑地の建設ばかりでなく、道路、墓地、上水道、水洗システムの建設にまで及び、さらに建築物の修理・改築や新たな建設にもとりくむ。また、1867年、78年、89年の三回のパリ万国博覧会では組織者の一人に名を連ねている。アルファンは第三共和政の時代には都市改造の最高責任者であるテクノクラートとなっていたのである。1891年に死去し、ペール・ラシェーズ墓地（cimetière du Père-Lachaise）に埋葬された。以上のようにアルファンの生涯を通してみると彼は一貫して官公庁の土木技術者であり続けた一方、緑地計画の責任者となったのをきっかけに対象範囲を広げ、最後には都市全体を取り扱っていたことが見てとれるのである。

*信州大学農学部

ところでアルファンは全部で25冊以上の著作や報告書を残しているが、第二帝政期には本を二冊、報告書を一冊出している。報告書は以前の任地での仕事を扱ったものだが、二冊の本はパリの緑地、すなわち彼が責任者として造成した緑地を取り扱っている。最初の本は1860年に出版されたが、ブローニュの森の建築物をその内容としている。²⁾ もう一冊の本は1867年から73年に出版された「プロムナードゥ・ドゥ・パリ」であり、³⁾ 彼が関与した緑地を絵や図面とともに記録した大著である。以後、「第三共和政の時代になってからも造園の本を数冊出版するが、パリの緑地に関してはこの本が群を抜いて詳しい。アルファンが彼自身つくったパリの緑地をどう考えていたのかを知る上で最も貴重で重要な本なのである。

この大著は二冊に分かれているが、主な特徴は二点ある。第一の特徴はパリの緑地を説明する前に長い序文(introduction)において造園の歴史が語られていることである。パリの緑地計画を歴史的に位置づける試みがなされているといえる。第二の特徴は記録の詳細さにある。一冊には彼が建設し、または改造した緑地の内容とその建設・改造過程が挿絵や小さな図面とともに述べられ、もう一冊には緑地の平面図やその風景画、施設の平面図や断面図などが収められている。パリの緑地は面積によるヒエラルキーをもって構成され、また一方で市内に均等になるように配置されたのだが、この緑地システムがこの大著の中で詳細に記録されているのである。この論文では第一の特徴をなす長い序文を取り扱う。序文は多くの示唆に富みながらも著者の思考があちこちに分散して述べられており、しかも部分的にしか顔を出していない有様なのでわかりにくいのだが、分析しながら論を進めていく。

3. 序文の概略

この序文はパリの緑地について述べられている本章の前に置かれているが、106もの挿絵をはさみながら59ページにわたる長文であることがひときわ目立った特色である。ページを示す数字はローマ数字を使用しており、アラビア数字を用いている本文とは異なっている。また活字の大きさにおいても本文よりも小さなサイズのものが使われている。これらのことから、この序文は本文からは独立した部分、別個の章として取り扱われていることが一目瞭然である。

さてこの序文は表-1に示したように全体が14節から構成されているが、大きく4部分にわけることができる。まず第1節の概論、第2節から第10節にかけて述べられている庭園の歴史、第11節から第13節にかけて述べられている庭園造りの考え方、そして最終節の都市緑地についてである。まずこの順序に従って内容を概観していく。最初の節である概論の冒頭には本文の構成がきわめて

簡潔に説明されている。すなわち、ブローニュの森、ヴァンセンヌの森、パリ内部のプロムナードの3部分からなり、技術的説明は繰り返しにならないよう第1部でしか説明しないと書かれている。本文に直接言及する記述はこれだけである。

次にこの長い序文を書いた目的が記されている。引用すると、「だが、始める前に、我々の都市のプロムナードに関する技術的説明への対応が読者の心にできるようするために、庭園芸術の歴史の要約を読者の目の前におき、そして芸術家により今日あまりになおざりにされている芸術分野の一般原則を示すことが重要であると考えた。」⁴⁾ とある。詳しい考察は後にまわすが、アルファンは当時の造園の評価が不当に低いとし、その状況を変えようとする考えのもとにこの序文を書いたことがわかる。

次に、この分野は建築とともに古い分野であり、同様の変化を被ったと説く。そして地方、気候、使われ方、その国の芸術の一般的な形により多様である旨が説明される。過去の作品だが、知育のために役立つほか、使える部分は近代芸術に取り入れることができるので、芸術家にとっての関心事だとしている。あらゆる芸術には固定した原則があり、一方で変化可能な部分があるので、様々な刻印を受けて常に変わって行くものと説明する。

次に古代の庭園への対処の仕方が説明される。当時、古代の様子を推測する試みはかなりなされていたようであり、庭園の推測も残されている遺跡や文献資料などで可能だとする。さらに芸術家の思考はある国のある時代の文化の様式に導かれるので、その作品には独特の刻印がなされるとし、この点も古代の庭園の推測に役立つとしている。そして古代の芸術作品を賛美し、アルファンの時代の作品を凡庸なもので不器用な模倣と批判し、この節を終え、庭園史の説明に進むのである。

第2節はアジアの庭園と名付けられているが、対象は古代メソポタミアである。この節全体が遺跡、文献、暑くて乾いた気候、そしてこの地方で維持してきた伝統からの類推により成り立つ。著者は宮殿と庭園が一体になっているととらえている。

第3節はエジプトの庭園だが、具体的に庭園が描かれていたレリーフからその整形的な形態や植栽の様子を説明する。そして飾り気のない建造物とつながる硬い線よりなっていたと解説している。

第4節はギリシアの庭園だが、それは整形的な区画がほどよく配置された姿だと想像されている。だがむしろ著者はギリシア人が自然風景への詩的感覚を保持していたことを取り上げ、建築と自然風景との調和を絶賛し、芸術的感性が大きく発展していたと評している。

第5節は中国の庭園である。著者はこの庭園を古い作品とも新しい作品とも同時にみなされうるとし、中国芸

術は独特の性格を持っているとする。自然風景への指向、建物と庭園の調和が見いだされるとしながらも、西洋の判断基準では割り切れないことを認め、求める理想が違うとし、取り入れるべきものは何もないとしている。

第6節はローマの庭園であり、整形的だが左右対称性を持たない形態と説明している。大理石、ブロンズや金でできた美しい装飾が価値を發揮できるように配置されているが、自然の美しさは細部にしかなく、その外観は

相対的に貧弱に見えただろうと記している。

第7節は中世の庭園だが、著者は芸術作品に値しないと評している。庭園は整形的であり、園路はまっすぐに通っているが、庭園全体が示す印象への関心はみられないとしている。

第8節はルネサンス期イタリアの庭園である。ここにおいて著者は庭園内部に風景を造ろうとする考え方から風景の内部に庭園を造ろうという考えに変わったと説く。

節	表題	ページ
1 概論	Considérations générales	1
2 アジアの庭園	Jardins de l'Asie	2
3 エジプトの庭園	Jardins égyptiens	3
4 ギリシャの庭園	Jardins grecs	4
5 中国の庭園	Jardins chinois	6
6 ローマの庭園	Jardins romains	8
7 中世の庭園	Jardins du moyen âge	10
8 ルネサンス期のイタリア庭園	Jardins italiens de la Renaissance	12
9 フランスのルネサンス庭園	Jardins de la Renaissance en France フランス庭園と呼ばれる整形式庭園の起源	17
	Origine du jardin régulier, dit jardin français	
10 イギリス庭園と呼ばれる非整形式すなわち田園風庭園	Jardins irréguliers ou agrestes, dits jardins anglais	28
11 庭園造りに用いられる様式の選択	Choix du style à adopter dans la création d'un jardin	38
12 フランス庭園と呼ばれる整形式庭園の図案	Tracé des jardins réguliers, dits jardins français	41
13 イギリス庭園と呼ばれる非整形式すなわち田園風庭園の図案	Tracé d'un jardin irrégulier ou agreste, dit jardin anglais	48
14 都市の公園とプロムナード	Parcs et promenades des villes	58

表-1 序文目次

注、 原文では節の番号、ページ数とともにローマ数字が用いられているが、この表では読みやすいようにアラビア数字に直してある。

整形的な庭園構成にもかかわらず、そこでは庭園外の眺めが重視され、自然を歓迎し、愛したとし、近代における庭園の啓示になったことに言及している。

第9節はフランスのルネサンス庭園及びル・ノートルの庭園を取り上げている。彼により、庭園が革新されたとして以前の形態を左右対称の釣合はとれ、一つの体系はできてはいるが、中世以来の自然を強引に著しく変える態度は変わってはいないとする。ル・ノートルがそれを多様な外観を持つ壮大なデザインに置き換え、近代の芸術的庭園を実現したと説明している。

第10節は非整形式あるいは田園風と呼ばれるイギリス庭園である。整形式庭園とはまったく別個な庭園がイギリスに生まれたことを著者は風景が穏やかにばかされる霧の多い気候と関連させ、植物の豊富さよりも光の戯れが生み出すコントラストにより風景がすばらしいものとなっているからとし、それゆえにこの自然が主要な役割を果たす庭園が構成されたと説明する。しかし、神殿などの小建築物を園内に建てることにより自然を詩的にみなす傾向を批判している。

第11節は庭園造りに用いられる様式の選択である。庭園は整形式、田園風の2様式にまとめられるが、その選択にあたっては植栽のための環境以外に土地の起伏と建築物の形が考慮されなければならないとする。

第12節は整形式庭園の図案についての説明である。まず狭義の理論に従うのを戒め、地形をうまく活かすこと、住居にふさわしい場所を造ることの2点が重要だとする。そして図面の上だけで練り上げるのではなく、その場所に立って決めなければならない点が多いと説く。整形式庭園は複雑な装飾であり、対立する色調、正確な輪郭が良い効果をもたらすが、高木が力強く生育する条件が必要不可欠としている。

第13節は田園風の図案についての説明である。庭園造りを起伏、植栽、園路の3部分に分け、起伏を一番重要なとし、優雅さを刻み込まなければならないとする。植栽はその地方の樹種を基調とし、他の樹種と混ぜ合わせて自然の多様性を取り入れる。最後に園路を眺めの中では見えなくなるように作る。変化のある眺めこそが庭園の魅力を成すと説いている。

最後の節は都市公園とプロムナードに関してであり、利用の面において説明する。園路や出入口を増やすなければならないし、ベンチや休憩所も多く置かなければならぬ。利用者自体が公園に活気を与えるので、植栽どうしの間隔を離し、見えるようにする。公園は都市の衛生上必要であり、その設置は科学の進歩と芸術の成果だとしている。

以上が序文の概略である。

参考書

4. 考察

この長い序文が書かれた目的はすでに著者自身による文章を引用して記したが、そこには注目すべきことが何点か含まれている。まず造園が芸術家におろそかにされている存在だったという点である。(今まで序文中の言葉を尊重し、「庭園藝術」と直訳してきたが、考察を進めていくここからは現在慣れ親しまれている「造園」という言葉を用い、「庭園」「公園」の言葉と併用して用いることにする)この否定的な見方は当時の社会において造園の占める地位が芸術ほど高くはないものとして捉えられていたことを示しており、この状況に反発し、覆そうという意図がこの目的に込められていることは間違いない。そこでそのために造園は芸術の一分野であるとし、一般原則を提示するというのである。

この一般原則とは何を示しているのだろうか。文中では具体的に指摘されてはいないのでわかりにくい。従って序文全体から検討されなければならない。概論の節では目的を記した後に庭園の持つ多様性が説明されている。すなわち、国、気候、文化、時代により異なること、さらに具体的に習慣、住居、材料、植物が地方により違うことを説く。説明が二度も繰り返されていることから考えると、造園の分野において外観の持つ多様性が当時の人々にある種の混乱を与えていたのではないかと察せられる。著者はここで芸術が持つ二面性に言及する。すなわち不变の原則と変化する部分の両面を備えていることである。しかしここでは一般的な指摘だけで終えられている。そこで次に序文の構成及び内容を参照すると不变の原則に対応するものとして二つの様式が浮かび上がる。整形式と非整形式である。この二本の軸を通して、各時代の、いろいろな国々の庭園における様々なものとの結びつきを示しており、この軸、及び他のものとの関係の記述こそが目的として掲げられた一般原則を示すことだと考えられる。ところでアルファンはどうして一般原則を取り上げたのであろうか。それは造園を芸術の一分野だと主張するのに当時必要な条件だったからであり、そのことにより社会に対して造園の重要性に目を開かせようとしたと考えられるのである。

ところでアルファンは芸術をどのようにとらえていたのだろうか。彼はまず「芸術は作業の量」⁵⁾であり、「要するに原材料に刻印された形により表現されている思考の構成でしかない」⁶⁾とし、そして「力強い印象は、発展した環境に適応しながら、根本的な思想により生み出される」⁷⁾とする。そこには絵画や彫刻、建築などの現存の芸術の枠組みにとらわれず、また芸術家とみなされる、みなされないにかかわらず、制作者の思考が反映された創造物すべてに芸術の対象を広げようとする意図がみられ、それと同時に芸術作品をただ美しいものというのではなく、思想的営為の産物とみなしていたことがわかる。彼は芸術を通じてではなくより深いレベル

でとらえ、その地点から造園を見据えようとし、規存の芸術と並べて考えようとしたのである。彼はさらにいわゆる芸術家が完全に独自で作品を生み出すと考えてはいない。「芸術家の思考は、伝統により伝えられ、日常の要求により変えられた一般的な様式により先導される」⁸⁾ とし、ある国、ある時代のすべての作品にある特徴を持たせるような共通した時代感覚を考えるのである。現在では文化と置き換えて理解することもできるだろうこの共通した時代感覚を各々の作品の上位におき、庭園を述べるときには庭園だけにとらわれることなく、建築との関係に着目すると同時に、この文化的な面からも考えようとするのである。これらの点がこの序文の特徴の一部を成している。

次にこの序文には時代による芸術の変化を発展ととらえる傾向が各所でみられる。そして「ギリシア人の自然風景に対する好みは非常に注目すべきものである。それは芸術的感性の大きな発展を求めるからである」⁹⁾ という著者の主張などから芸術の発展の媒介を務めるもの一つとして自然風景への好みを取り上げ、自然へ眼を向けることを重要な位置に置いている。この傾向は序文全体にわたって強く認められ、アルファンはこの点を深く意識しながら序文を書いたことがわかる。つまり、彼は造園の歴史を発展してきたものとみなすための一つの価値基準を与えたのであり、自ら関与し、造り上げたパリの緑地をその延長線上に載せたのである。

それではアルファンは庭園のどの面に主な関心を寄せたのだろうか。庭園の発展に関する記述の中に次の表現がある。「庭園は木陰を与え、珍しい花やプロムナードのための簡素な空間を集めることに向けられた単なる植栽空間ではない。」¹⁰⁾ という文だが、ルネサンスの時代となり、やっと庭園が豊かになるという分脈の中で使われている。つまり、庭園に刻印されているもの、すなわち人間の関心や意図、ある時代に共通する意識などを読みとることがアルファンの庭園を見る眼であったと考えられるし、二つの様式とはこれをふまえた上の形なのである。

そこで造園史を今一度振り返ると、まずアルファンはルネサンス時代のイタリア庭園以降の庭園を芸術とみなしていることがわかる。そしてその継続的な流れは整形式庭園であり、古代を発祥とし、ルネサンス時代に芸術の域に達し、フランス庭園に発展したとする。これは当時の芸術史の見方に沿ったものであり、いわば公式的とも言えるものである。しかし著者はそこにもう一本の軸を設定していると考えられる。それは自然の美しさに眼を開く非整形式庭園の流れであり、理想化された古代ギリシアを始原とし、ルネサンス時代のイタリアで再発見され、そしてイギリスにおいてまた新たに見出だされるという断続的な流れである。著者が真の芸術とまで言う

この流れを強調し、造園史上に明確に位置づけることが序文を書いた目的の一つではないかと考えられるのである。

アルファンの画いた造園史の流れによるとパリの緑地はどのように位置づけられるのだろうか。それらは理想化された自然景観を造り上げ、眺めることにより重点が置かれているのだが¹¹⁾、イギリス庭園の延長上にあることは明白である。しかし著者がそこで批判した傾向、すなわち自然を詩的に見立てる役目を持った小建築物が庭園内部に設置されたことにより自然の風景が文学的、思想的風景に変質してしまう点だが、この傾向は排除されている。つまり風景をリアルに見ることに主眼を置くのである。また、自然の美を表わすための技法についてだが、当初イギリスでは当てずっぽうな配置だったとしても、やがて改良されながらも、その一般的な規則が表わされるのは19世紀当時のこととしているのである。つまりパリの公園は造園史上最も進んだ創造物であり、しかも過去の庭園の成果を積み重ねた上に成り立っている芸術に値する作品とアルファンが自负していたことが明らかになるのである。

5. 19世紀の社会的背景とアルファン

アルファンが活躍した時代である19世紀は科学と技術の時代だった。¹²⁾ 産業革命が進行する中で、蒸気機関の増加が著しく、鉄道網もフランス全土を網の目のように覆っていく。科学はこの世紀の間に急速に進歩し、科学万能主義（scientificisme）の思潮が現われる。科学の進歩が明るい未来を約束しているようなイメージである。この思潮の中、各分野で追求されたものの一つに一般法則がある。アルファンが造園史において一般原則を求めたことも唐突なのではなく、この思潮に基づいたことなのであり、そればかりか造園史に発展の概念をかぶせて思考しようという態度も当時のこの思潮の中で理解されるべきものなのである。

また、アルファンのこの傾向を検討する場合、彼が受けた教育に立ち帰らなければならない。彼が通った学校はフランスの理工系教育機関を代表する理工科学校と土木学校であり、まさに科学と技術を学んでいたのである。造園以外の技術水準を熟知し、仕事をする中で科学と技術の発展の有様を目の前で見てきた彼が造園の分野にもこの思潮や成果を取り入れ、造園の社会的な地位を上げようとするのも当然のことだったのでないかと考えられるのである。

この大著が出版されたのは1867年であり、それはパリ万国博覧会が開催され、またビュット・ショモン公園が完成した年でもある。パリの公園の評判はきわめて良かった。それを科学と技術の発展の成果とし、同時に芸術的な創造物として社会に強くアピールするためにこの記念

碑的な大著が出版されたのではないかと思われるのではある

註および引用文献

- 1) George Eugène HAUSSMANN (1890): Mémoire du Baron Haussmann 3 : 125-126
- 2) Adolphe ALPHAND (1860): le Bois de Boulogne architectural ただし解説は建築家であったテオドール・ヴァケール (Théodore VACQUER) が書いており、アルファンの本ともされる理由は本の企画を担当したか、または責任者ゆえに名前を出したと考えられる。
- 3) Adolphe ALPHAND (1867-73) : Promenades de Paris
- 4) 3)と同じ, p.I 1.9-11
 "Mais, avant de commencer, nous avons pensé qu'il importait, pour préparer l'esprit du lecteur à la description technique de nos promenades urbaines, de placer sous ses yeux un résumé de l'histoire de l'art des jardins, et d'indiquer ensuite les principes généraux d'une branche de l'art, trop négligée de nos jours par les artistes."
- 5) 3)と同じ, p.1 1.34
 "L'art est la quantité de travail..."

- 6) 3)と同じ p.17 1.1-2

"L'art n'est en somme qu'un agencement d'idée, traduites par des formes imprimées à la matière brute."

- 7) 3)と同じ p.26 1.2-3

"une impression puissante ne peut être produite que par une idée fondamentale heureuse, s'adaptant bien au milieu où elle se développe."

- 8) 3)と同じ p.2 1.7

"La pensée de l'artiste est guidée par des formules générales, transmises par la tradition et modifiées par les exigences quotidiennes..."

- 9) 3)と同じ p.5 1.28-29

"Ce goût des Grecs pour les paysages naturels est très-remarquable, car il exige un grand développement du sens artistique."

- 10) 3)と同じ p.12 1.15-16

"Ce (les jardins) ne sont plus seulement des plantations destinées à donner de l'ombre, à rassembler quelques fleurs rares, un simple espace réservé à la promenade."

- 11) 佐々木邦博 (1988) : オスマンのパリ改造計画における緑地計画の理念及びその実態について：造園雑誌 51 (5), 43-48

- 12) G. デュビイ, R. マンドル (1970) : フランス文化史 3 : 人文書院 106-133

RESUME: Adolphe ALPHAND (1817-91) était l'ingénieur que, au second Empire, HAUSSMANN, préfet de Seine, nomma au directeur de la section de l'espace vert pour transformer Paris. Il écrivit "les Promenades de Paris", décrivant ces promenades en détail qu'il concernait. Dans ce livre, il y a une introduction longue, où il a écrit l'histoire de l'art des jardins. On y trouve ses vues sur le parc. Je l'ai analysée et clarifié deux caractéristiques principales.

- 1) Intention forte d'améliorer la position sociale de paysagisme, branche d'art trop négligée à cette époque par les artistes.
- 2) Vues que l'histoire de l'art des jardins était un processus du développement et que son critère constituait l'admiration du paysage naturel.
- Il en résulte que le parc de Paris est une œuvre d'art admirabre, et se situe la meilleure position dans l'histoire de l'art des jardins.